

Title	紀元2600年記念建國の劍星：海南島の十字星に因みて：星と兵隊
Author(s)	高城, 武夫
Citation	天界 = The heavens (1940), 20(230): 241-247
Issue Date	1940-05-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/168010
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

◀ 紀元2600年記念 ▶

けん こく つるぎ はし
建 國 の 剣 星 高 城 武 夫

——海南島の十字星に因みて—— 「星と兵隊」

主 旨 本文は昭和14年2月、皇軍が海南島敵前上陸に端を發し、以來海南島で見える南十字星を中心にして、皇軍勇士と大阪市プラネタリウムに於ける筆者との間の文通及び科學館にて「戦線と星圖」の作製發送、そして南十字星が2600年前に内地でも見えたことを結び、この十字星を新しく「建國の剣星」と呼んで、皇紀2600年を記念する筆者の體驗録である。

x x x x

この實話は、去る2月14日の夜、2600年紀元節奉祝ラヂオ放送に物語劇となつて、JOBKより放送された。

『海南島の十字星』 (夕6時より全國放送)

劇團ドオゲキ 渡邊三郎氏…脚色・演出

田中賢司氏…演出 外 協同劇團

昭和15年2月5日立春の日 住吉の寓居にて

昭和の聖戰を飾る南方攻略の華は、昭和14年2月10日未明の海南島の奇襲敵前上陸である。我々は今その一週年の記念日を紀元2600年の紀元節の前日に迎へることとなつた。そして一年前の皇軍の壯行を再び想ひ起すのである。

海南島の十字星

熱砂捲く海南島は北緯18度から20度に位置し、現在日本内地では見られない壯嚴な南十字星が、この島では見られるのである。上陸當時の深夜には東南方の地平線上に昇つて輝いてゐた。美しい十字星はわが皇軍を海南島に迎へたのである。

華々しき海南島攻略の模様は其後銃後へ傳へられ、やがて内地は櫻の花盛りとなつた、其頃筆者は朝日新聞の依頼により、「海南島で見える南十字星」なる題で、紙上に下の一文を書いた。

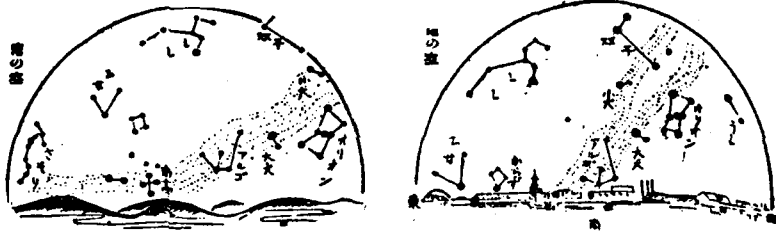
『海南島では、この頃夜半の南の空に美しい南十字星が昇つてゐます。4つの大きな星が、十字形に並んだ壯嚴な姿は、恰も教主の十字架が天高く突出つてゐる様に思はれて、誰も心被打れるものです。(中略)

さて海南島では南十字星はこの頃だと、赤い夕日が椰子の葉かげに沈んでから3時間程経つて、東南の地平線に傾いて昇ります。深夜には地上から10度の高さに十字が直立して南中し、やがて早曉の東天に、赤い火星が昇り、「さそり」座が天上をうかがふ夜明け前には、西へその姿をかくします。

また南支では、廣東、香港からでも、この頃だと、夜半に南の地平線上に低く見られますから、皆さんが若し兵隊さんに慰問のお便りを出される時には、ついでにこの事を知らせてあげて下さい。』(中略)

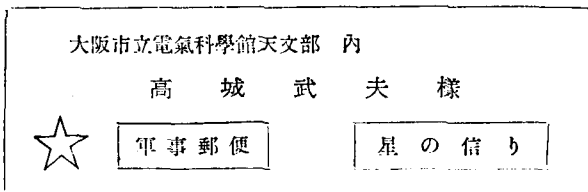
後日わかつたことだが、右の新聞記事は海南島の勇士へ、銃後の某人によって、手紙と共に送られて行つた。

ここで筆者は思つた。——あの十字星を見られる海南島を攻略出来た今日、恰も今より2600年前には内地よりも、この4つの星は見られたと云ふ事實である。



長くも神武天皇御東行の頃にも、壯嚴な十字星は正に天皇の御寶劍の如く輝き、今は海南島の空で、皇軍を護り賜ふのであらう。そこで當時筆者は十字星を海南島攻略に因んで「神武帝の劍星」と假に呼んで、天界誌上(東亞天文協會發行)にこの事を書いたことだつた。

(註) 十字星は西洋で「アマル Amal, 王の劍」とも呼ばれた記録がある。



目に青葉、初夏の風そよぐ頃となつて、海南島の一勇士より一通の軍事郵便が届けられた。それは——

4月30日の日附

飯田部隊 長屋隊

藤井常三郎氏より(廣島神邊町出身)

拜啓 私事は去る2月10日南支の劃期的作戰たる海南島嶺前上陸に参加しました皇軍の一員で御座います。現在では同島の首都とも云ふべき〇〇市に守備として待機して居ります。

本日内地より送附して來ましたる新聞紙上にて拜見致しましたが、内地では觀る事の出來ない南十字星ある事を初耳に致しましたが、今夜も城壁に昇りまして南天を望みまして、發見に務めました處、判然と指す事が出來ませんので、致すと存じますので、周圍にありまする諸星の位置を加へて御通知の程御願ひ遺憾もので御座います。云々。

上の手紙を読んだ筆者は、早速十字星や南天の星座を大きな星圖として描き、返信を添へて送つたのであつた。

又の日、更に同島上陸の勇士より下の軍事郵便が届いた。

日附不詳

佐々木(政)部隊 渡部隊

清村嘉平氏より

(同氏は大阪市電氣局用品課檢收係の出身、筆者は未知である)

拜啓(略) 私は只今海南島で働いてゐる電信隊の兵隊です。支那の童子軍の携帶手帳に星で南北を知る項があります。(童子軍とは日本の青少年團か、ボーイスカウトの如きものか) 時間を知る事も書いてあります。敵國に來て、戦には勝つたが、星の事では却つて教へられることが多いのは、どうでせうか。

私の居る〇〇市の空は都市光芒が少ないので、晴れた空はすばらしいです。今晚も9時頃露臺から見ましたが、射手、双子、白鳥、大丈、北斗、冠などの星座が記憶に蘇り、且つ、見ることが出來ましたが、南十字星らしいのが見えぬので、落膽してゐます。'キネマ「躍進日本」で南十字星座の形は記憶してゐますが、實物を見たくてなりません。バイヤス灣上陸當時はよく晴れて、明るい流星を見て、おどろいたものです(敵の信號彈のやうに見えて)。餘り空が美しいので、夜空を見る機会が多いので、つい星に親しみたくなります。廣東で1月下旬に日没後西方でしばらく黃道光の如きものも毎晩見えた様です。

この頃當地では太陽が南中の時は頭のでつぺんにある様です。日本南進せりの感深いのです。嘗て科學館でプラネタリウムを拜見したのでを想起し、疑問が湧いたので御尋ね致しました。

この手紙を受取つた筆者は、もう、じつとして居られなくなつた。

戰 線 の 星 圖

遂に筆者は仕事の餘暇に、簡単な星圖を描いた。これは北・中・南支の夏の空を北天と南天に分つたもので、これに「戦線の星圖」と名附けた。これは電氣科學館の名に依つて約500部の印刷物となり、先づ市電氣局電燈部出身の戦線の勇士達へ、そして又多くの知己や未知の勇士たちにも配布された。それは恰も「時の記念日」の6月10日であつた。15日頃には星圖は慰問雜誌「光」の附録

ともなつて前線へ送られて行つた。

(上の事は當時大阪毎日紙上にも報道せられたが、尙、このことは、科學館内の東亞天文協會の名目に依つて居た。)

盛夏の8月11日に、海南島の清村上等兵より返信が届いた。

「拜啓 本日(7月18日)6月18日出の星圖も早速御送り下され、御禮の言葉もありません。早速其晩懷中電灯と共にバルコニーに登り(兵舎は某ビルディングです)先日信號灯と間違へたのが火星なりと確め、琴、わし、蛇遣ひ、まき夫、乙女、からす、などを確と發見し、これをどりしました。かゝる和名の星座ありと知つた丈さえ嬉しかつたのです。此頃は南十字星は、残念乍ら、當地の地平線近くが、夜分は、かすんでゐるので、見えませんが、5月中から6月末迄存分に見て、會ふ兵隊さん達に知らして上げたものです。5月中旬、初めて見た時は、餘り形が小さいので落膽しましたが、某地へ移轉し、投爆された敵兵舎の藁の上に見た時は大きく、十字架といふよりも、ぐさりと突刺した日本古代の劍と云ふ感がして、何となく神秘でした。それに、初めて「サソリ」(尾を持つ毒蟲)を見た晩に蝎星座を見た時は、一方きみわるかつたです。

先づは御禮まで。 敬具」

ああ正に御劍の星は海南島の空で雄々しくも壯嚴に輝いてゐるのである。筆者の感激は一入ではなかつた。

又、太田部隊中田隊の藤田晋吉氏よりの便りには、

「南支でなければ見えぬ南十字星、3日ばかりで雲のない日に9時までに見ました。一生の記念です。云々」とあつた。

その後、初秋の昔づれと共に各地の兵隊さんたちから續々と軍事郵便が到着した。

○ 牡丹江省柏部隊 森野理吉氏より

「大毎紙上にて星圖調整を承りました、一葉御惠送下さい。兵と共に無限のくづる星を數へて慰むことを楽しみにして居ります。云々 6月24日」

早速星圖表を送つた。返信に

「生憎と數日曇天、東方地平線近く赤色の火星を見るのを待つてゐます。第一線は極めて堅固です。御安心下さい。云々 7月19日」

上のやうな星の便りは更に續いた。

- | | | |
|-------|----------|-------------|
| ○ 北 支 | 杉山部隊經理部 | 檜 原 菅 爾 氏 |
| ○ 北 支 | 阿南部隊落合隊 | 河 合 孝 一 氏 |
| ○ 北 支 | 横山部隊黒石部隊 | 松 野 岩 穂 氏 |
| ○ 中 支 | 廣野部隊坂本部隊 | 馬 詰 眞 一 郎 氏 |
| ○ 南 支 | 伊久間部隊中村隊 | 村 田 忠 明 氏 |

- 北支 那須部隊須藤隊本部 兵 藤 道 義 氏
 ○南支 本 部 隊 納 富 壽 生 氏
 ○中支 篠 原 部 隊 上 田 宗 三 郎 氏

以上の諸氏は何れも星圖を請求依頼し來り、早速發送するや、丁寧なる禮狀を寄せられた人々である。

十 字 星 の 物 語

南十字星の古い記録は、既に今より1800年前の西曆紀元140年にギリシヤの天文學者トレミイが書いた天文書「アルマゲスト」Almagest に4つの星として記され、又有名なダンテの「神曲」の煉獄篇には、

「我は右手にむかひ、ところを南極にそそぎ、原始の民(アダムとイヴ)のほかに見しこともなき四つの星を見ぬ」と歌ひ、又、

「四つの清らかな星の光は、彼の顔を輝かしく飾りたりし故、あたかも太陽を前にしたりしもの如き彼を我は見ぬ」とある。

ダンテは十字星の4つの星を「思慮、節制、剛毅、正義」の四元徳の象徴としたのである。實に意味深い十字星である。

西曆1501年にアメリゴ・ゴズプツチが彼の第三航海に南十字星を發見し、

「われ、ダンテの四つの星を見たり」と狂喜したと云ふことである。

十字星は初め、隣りのセンチウルス星座の星となつてゐたのであるが、西曆1677年にフランスのロワイエが「十字架座」として獨立せしめた。げに昔から南海を航海する人々には感激の星であつた。

寛永の頃の天竺徳兵衛物語にも「このマカオの海の、云々、此處南の方に「大くする」と申す星出申候。此れ迄は日本の北斗の星を見立て時計を以て方向を伺ひ走り申候。此處より「大くする」「小くする」と申す二星を考へ走り申候」とあるから、航海には小くする(南十字星)はなくてはならぬ星であつた。

(註)「神曲」は生田長江氏譯より、又物語の一部は野尻抱影氏の文による。

南 方 を 指 す 星

十字星の4星の内、縦の長軸の2星の間隔を約4倍延長した空の一角は天の南極に當る(南天には今南極星はない)ので、この十字星だけで「南」の方位を知るのに便である。これが昔から舟乗りたちを護つたのである。

北斗星は北天を代表し、十字星は南天を表現する。オーストラリヤでは國旗に美しい十字星の實景を畫いてゐる。

あざやかに 南くるすの 星みえて

舟ちすずしき 夕ぐれの空

新村 出氏

 皇 紀 元 年 の 空

昭和15年2月11日から、正に2600年前は、長くも神武天皇が御即位あそばされた紀元元年辛酉正月朔日である。

その御即位當時には宵空にオリオン星座が厳として南中し、夜更けには、南の地平線上に十字星が、燦々と輝き、大和の宮殿からも見られた。2600年間に、十字星は臺灣より南へ、海南島へ行かねば見えぬ様になつた。

長年月の間に星空が移動する事實は地球の歳差と呼ぶ現象による。(以上の事實は歳差の計算や、又、プラネタリウムによつて容易に實驗出来る。)

 建 國 の 劍 星

悠久2600年の光は巡り、世界に比類なき日本が、意義深き紀元節を迎へ、新日本時代を劃するの歳に、あらゆる有意義な事業は催され、その記録は残されつつあるが、地上と共に天上にもこの新日本が記録されてよからうと思ふ。ここに筆者は2600年を記念して、「新日本星座」の築かれんことを期待するものである。それは最も厳肅な意義を持ち、永遠に燦くことである。

即ち、その初めに「南十字星」を上述の如き意味によつて、今日「建國の劍(つるぎ)星」と呼びたく思ふのである。

想へば建國紀元元年の日本の空に輝いた十字の劍星ではあつた。今2月11日に2600年の紀元節を迎へ、又2月10日は海南島敵前上陸の1週年記念日である。今年には海南の孤島で再び深夜の空に輝き、1年前の聖戦と、2600年前の建國の大業を祝福した星である。實に感激なくては仰がれない。この「建國の劍星」は、神武天皇の御威光のやうに、世界に永遠の御光を發してゐるのである。

「建國の劍星」南中して、榮ある紀元節當時の黎明の東天に琴座の環狀星霧が遙か2600光年の彼方より本年は建國紀元元年の當時の光を發し、寶環のやうな姿を見せてゐるのも、殊にめでたき光景である。(註・環狀星霧は山本博士による)

そして尙、2月末には日没後の西天に5遊星が一直線に「うを」座に並列する本年特別の壯觀も觀られる。蓋しこの天上の祝景は、日本のために奏される宇宙樂のステージと化したのであらうか?

「建國の劍星」の讚歌が漂ふ!

x x x x

劍星 今はまみゆる 海南島

神代のむかし おもほゆるかな

小學校時代の恩師

兼 松 弘 造 氏 より

(名古屋市第三高女教諭)

「星と兵隊」後日譚

去る2月23日、9ヶ月前の前記の大毎紙の記事が奇縁となつて、目下、中支戦線で活躍中の中村部隊の勇士飛原富士登氏より左の軍信が舞ひ込んだ——

「暗黒の星空を眺め、忍び寄る寒氣を打拂ひつつ、銃劍執りて歩哨に立つ度に、何か無窮の宇宙に對して、しみじみとした神秘眼を向けて探求したいと云ふ衝動に驅られてゐた内、フト壁に貼り付けてあつた古新聞の中に「星と兵隊——戦線の勇士達から星圖の注文が殺到云々」の記事を見付け、小躍りして、早速筆を執つた次第です。甚だ厚顔ですが御聞きとどけの程御願ひ致します。云々」

勇士達が、星を慕ふ真心のほどは、銃後の我々を何時までも鞭撻して止まない。何度となく、この激しい熱情の續くままに、筆者は近日勇士たちへの約束を果すべく、戦線用「星座エハガキ」を作製し、御恩を報じやうと、目下その準備に取りかかつた。

北海道・枝幸の大火

去る五月11日、われ等に親しみ深い北海道の北見の枝幸町は、附近より起つた山火事に襲はれ、全町殆んど類焼、ほゞ500戸を烏有に歸し、15戸を餘すのみ、20名ほどの死傷者を出すに至つたと報ぜられる。枝幸は1896年と1936年と40ヶ年間に2回も皆既日食に見舞はれ、前には米國と佛國の觀測隊を迎へ、後には中華民國と京都花山天文臺からの觀測隊を迎へた天文に奇縁の町であり、1900年以來、こゝには、世界に類の無い「日食圖書館」といふものがあり、今までも、天文關係者の多くを送迎した所であつた。勿論、此の有名な圖書館も、其の他一切のものが灰になつて了つたわけで、痛恨の至りである。

訂正——天界228號表紙の裏「今年劈頭の大黒點」の圖中

9 ^d 9 ^h 10 ^m	は	8 ^d 8 ^h 45 ^m	に訂正
10 ^d 9 ^h 20 ^m	は	9 ^d 9 ^h 10 ^m	〃
11 ^d 8 ^h 30 ^m	は	10 ^d 9 ^h 20 ^m	〃
12 ^d 8 ^h 30 ^m	は	11 ^d 8 ^h 30 ^m	〃
13 ^d 8 ^h 30 ^m	は	12 ^d 8 ^h 30 ^m	〃

説明文中“黒點群に對する太陽像の大きさは直徑15浬です”と云ふのは取消します。掲載せられました圖は、御送り申し上げましたものより少し縮めてありますので、前記の割合は成り立ちません。試みに此の黒點群の大きさを申し上げますならば、6^d 8^h 30^mの黒點群に於ける右側の黒點の大きさは太陽直徑の約20分ノ1であります。

尙、此の黒點群は二月22日第3回目の出現、三月21日には第4回目の再出現をなして居ります。(東京 阿部正明)